

学内研究組織（2024 年度）

研究課題：「自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン手法の構築」

## インテリア専門誌分析・家具継承調査による インテリアデザイン手法構築に向けた分析

Development of Interior Design Methodology Through Interior Specialty Journal  
Analysis and Family Furniture Inheritance Survey Research

松田 奈緒子（MATSUDA Naoko）

住み手がそこに住み始めたときから、自分の生活や感性に相応しい個別の空間に仕立て上げることを「空間の自己化」という。この過程でインテリア空間には自己が投影され、逆に、自己化されたインテリア空間に自己は影響されることから（松田・加藤 2014）、インテリア空間をある意思・意図をもってデザインすることにより、自己の効果的・肯定的変化を促し得ると考えられる。そこで本研究は、住み手が行う「空間の自己化」を手掛かりとして、インテリア空間のデザインをサポートする手法の構築を目指す。

R6（2024）年度は、①時代における社会とインテリアとの関係性の検討、②インテリア要素の要である家具の継承に関する分析・考察を実施した。

①について、時代ごとのインテリアの位置づけや社会的役割について、インテリア専門誌『DREAM』の創刊号（1964/03/01）から 492 号（2021/12/25）までの計 489 冊を通覧し、表紙と特集で使用された言葉に対し、テキストマイニングツールを用いて分析を実施した。これと前年度までに実施した、表紙で使用されたインテリア要素の時代ごとの数の変化や撮影対象の変遷、使用された色彩の平均色の算出、『DREAM』の編集長に対しインタビュー結果を合わせ、分析を深めた。その結果、インテリアに対する専門家の意識と社会一般の認識とのずれが示唆された。本調査の成果の一部を日本デザイン学会にて発表した（「雑誌『DREAM』の表紙からみるインテリアの半世紀の考察」、第 72 回春季研究発表大会、pp.502-503、2025 年 6 月）。

②について、前年度の調査で、フランス人にとっては空間を自己化する上で家具の継承が効果的な役割を担っていることが示されたが、日本での実態は明らかになっていなかった。そのため、30 歳以上の既婚者を対象に、成人後の家族や親族からの家具継承経験についてオンライン調査を実施した。その結果、34%の人は譲り受けたことがあり、その 412 名のうち約 7 割は現在も使用していたが、「まだ使えるから」が 65.2%と最も多く、続いて「使い勝手がよいから」33.8%、「頑丈だから」23.1%となり、実用性重視の傾向が確認された。一方で、「見た目が気に入っているから」20.0%、「思い出があるから」16.2%、「長く使われてきた歴史があるから」16.2%といった感情的・精神的な価値を重視する回答は、より少なかったことから、自己と継承家具との関係性は希薄な傾向が窺えた。なお、回答者の基本属性は、子供がいる世帯が 80.6%、世帯年収は 400-600 万円未満が 21.8%で最多となっている。今後は、年収や職業別の社会経済的背景による家具継承経験の相違を詳細に分析する必要がある。